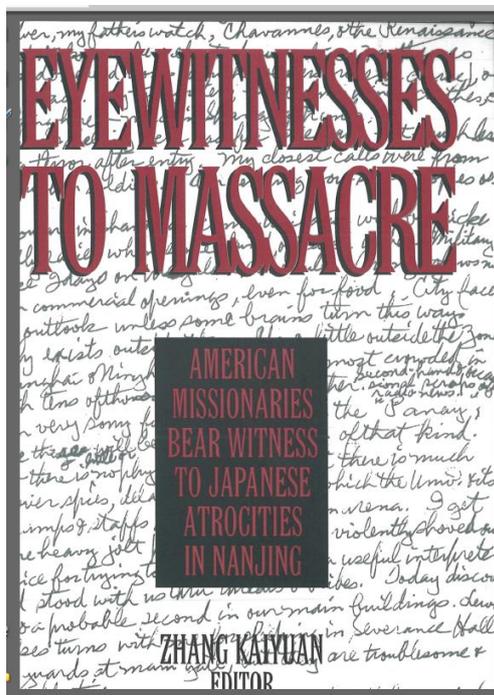


アメリカ人の 「南京虐殺の目撃証人」は一人もいなかった

松村俊夫

序言

「南京大虐殺」とは、1937年12月13日の南京陥落直後から、日本軍が起こした住民の大量虐殺を含む悲惨な事件であると認識しているアメリカ人は多い。その根拠として、著名なアイリス・チャンの『レイプ・オブ・南京』がある。しかしその内容は事実とするには極端に過ぎるとの批判もある。そこで公平に判断をしたいという人は、目撃証人であったアメリカ人の記録はないものかと考えるに違いない。



ここに、その期待にこたえるべく刊行された絶好の資料があるのである。左の写真に見る通り、その名はズバリ、『南京虐殺の目撃証人』（Eyewitness to Massacre）である。副題を『南京に於ける日本軍の残虐行為の目撃証人のアメリカ人宣教師』という。この書の原資料は、エール大学神学部図書館に所蔵されている文書で、M. E シャープ社、ニューヨークが1984年に出版した。そこには、事件当時南京に在住していた宣教師などのキリスト教関係者が、南京から避難していた家族や友人へ送った手紙などが収められている。外部に向けた、言わば宣伝目的の文書とは異なり、家族にあてた私的な文書なので、かなり本音が表現された資料であると見ることが出来る。では、どういう人々が本書に登場するのか、先ず、これらの人々の経歴を、本書から抜粋して記すことにする。

ヴォートリン＝1912年イリノイ大学卒業、キリスト教伝道の宣教師となって中国へ派遣され、南京の金陵女子文理学院の教師となる。その後、同学院の実務上の責任者学長になった。

ベイツ＝1920年にオックスフォード大学の文学博士の称号を得て、宣教師として南京大学の政治・歴史学教授となり、後に副学長となった。

ウイルソン＝1906年南京生まれ。プリンストン大学、ハーバード医科大学出身、1935年に指名されて翌年南京のキリスト教系鼓楼病院に着任した。

スマイス＝シカゴ大学で社会学の博士号を取得し、1934年にキリスト教協会から指名されて南京大学社会学教授になった。

マッカラム＝1917年オレゴン大学出身。エール大学の神学士号とシカゴ神学学校の修

士号を持つ。1937年冬から、南京大学病院の経営に携わった。
マギー＝1901年エール大学卒業、1911年にアメリカ聖公会神学士となり、1912年に伝道団宣教師として南京に赴任。
フィッチ＝1883年蘇州生まれ、キリスト教長老派伝道団牧師の子息、1906年ウースター・カレッジ卒業後ニューヨークの神学院に属し、1909年上海のYMCAで働くことになって中国に戻った。
ミルズ＝1912年にコロンビア神学院から神学士を授与され、同年から1931年まで中国のYMCAで働く。1933年から49年まで南京の長老教会外国伝道団の一人。
フォスター＝1917年プリンストン大学卒、1919年渡支し、聖公会伝道師として教鞭をとった。南京陥落の約1ヶ月前に南京のセントポール聖公会に転勤となった。
このように、記載者の全員がキリスト教の高等教育を受け、伝道師として南京に滞在していた人々であった。

もし、これら教養のあるキリスト者9人の人々が実際に日本軍による虐殺や暴虐を見たとの記録を残していれば、南京事件は事実だったとの有力な証拠となる。ところがおどろくべきことに、400頁以上あるこの資料が収めている膨大な彼等の記録には、事件が起きたとされる12月13日から翌年にかけて、日本軍による住民虐殺を**目撃した**という記述は全く無いのである。強姦、略奪などの残虐行為も、難民からの訴えを聞いて現場へ駆けつけても犯人は逃げたあとで、実際に日本兵の犯行を見た人はいなかったのである。つまり「書名」とは全く逆に**アメリカ人の虐殺（残虐行為）の目撃証人は1人もいなかった**ということなのである。実は極めてミスリーディングな書名の本なのである。

では、何故これらの人々が目撃証人とみなされるようになったのかを調べるうちに衝撃的な事実がわかってきた。それは前記9人のアメリカ人のうち、南京陥落の直後から日本軍による暴虐を内外に伝え続けていたベイツとフィッチの存在である。ベイツは蒋介石に任命されていた顧問として日本軍暴虐の宣伝活動を続け、その功績によって戦争中と戦後の二度も蒋介石から勲章を受けていた。（注1）

フィッチはベイツの協力者として働いたあと、1938年3月以降は香港を経由してアメリカに帰り、全米を反日宣伝をして廻っていただけでなく、7月には2つの大きな親中反日団体の立ち上げに加わり、その幹部として活躍するようになる。（注2）彼等の宣伝の目的は、蔣政権からの依頼のもとに、日本軍がいかに残虐な軍隊であるかをアメリカの人々に宣伝することによってその同情をかちとり、蔣政政権への多くの援助を得ることにあった。従って彼等にとっては、そのような宣伝内容が事実か否かは問題ではなかったのである。このような謀略活動は、今でも世界各地で見られるが、彼等の立場を知らなかった同僚のアメリカ人達は、日本人に対する理解不足もあって、ベイツとフィッチの主張をすっかり信用してしまったのである。

本論考は、以上のことを”Eyewitness to Massacre”の文章を主たる資料にして証明するものである。本文中に示す頁数は、断り無き限り”Eyewitness to Massacre”のそれである。読者の理解を助けるために南京の地図をなるべく示しながら説明を進めることにする。

「南京国際委員会」と「安全区」

1937年11月中旬頃から、アメリカの宣教師を含む南京大学のスミス、ベイツが中心になり、安全区を作って非戦闘員を收容しようという計画が検討された。その実現を目指して結成されたのが国際委員会である。そしてドイツ人ラーベが委員長に選ばれた。そのいきさつを書いている**1938年1月24日のミルズの妻への手紙**によると次のようにある。

安全区に関しては、私たちは上海の神父ジャキノゾーンの安全区の成功から、その方法についての啓示を受けた。彼の名前がそこにはっきりとついているので、私はそこを彼の区と呼んでいた。私たちの最初の仕事は、この地域についてのアイデアを支那側と外国人の友人たちに明確に伝えることだった。そして支那側の支持があることを明らかにするように交渉することそして最後は日本側との話し合いだった (245頁)

ジャキノ神父は、上海周辺の日支両軍の衝突から支那人民衆の生命財産を守るために、フランス租界に近い住民の密集区域を中立区として軍隊の侵入を防いだ。ところが南京の国際委員会も、同じように民衆を危険から守ろうとしたのだが、その場所の選定が上海とは違っていた。南京の安全区は、住民や商店が多い南京市の南部一帯ではなく、南京中央部分の住民は少なく、最もアメリカなどの外国資本と権益が集まっていた地区に定められた。その意図は、それらの権益を守ろうとする気持もあったようである。この東西約1.6キロ、南北約3.2キロの細長い六角形の地域の安全区へ、南京陥落の約1週間前から人々が流れ込んだ。避難場所が無くて南京に残留していた最も貧困な約20万の難民は、僅かの家財道具と出来るだけ多くの食料品を持って安全区の外国人の施設や公共建物に設けられた20ヶ所のキャンプやその他の建物に充満した。そして安全区以外の南京城内には、難民は殆どいなくなってしまった。従って南京も地域の選定に若干問題はあったが、安全地帯としては充分機能していたのである。

さて、国際委員会は安全区を攻撃しないように日本軍に要請したのに対して、日本軍は次のような方針でのぞんだ。

12月16日に国際委員会を訪れてきた岡崎勝男総領事は、我々に対して法律的に認めることは出来ないが、承認したような取扱いをするだろうと述べた。(第35号文書)
(注) 第〇〇号文書とは、国際委員会発行文書が1939年徐淑希編の『南京安全区档案』(Documents of the Nanking Safety Zone) (注3)にまとめられているなかの文書番号。

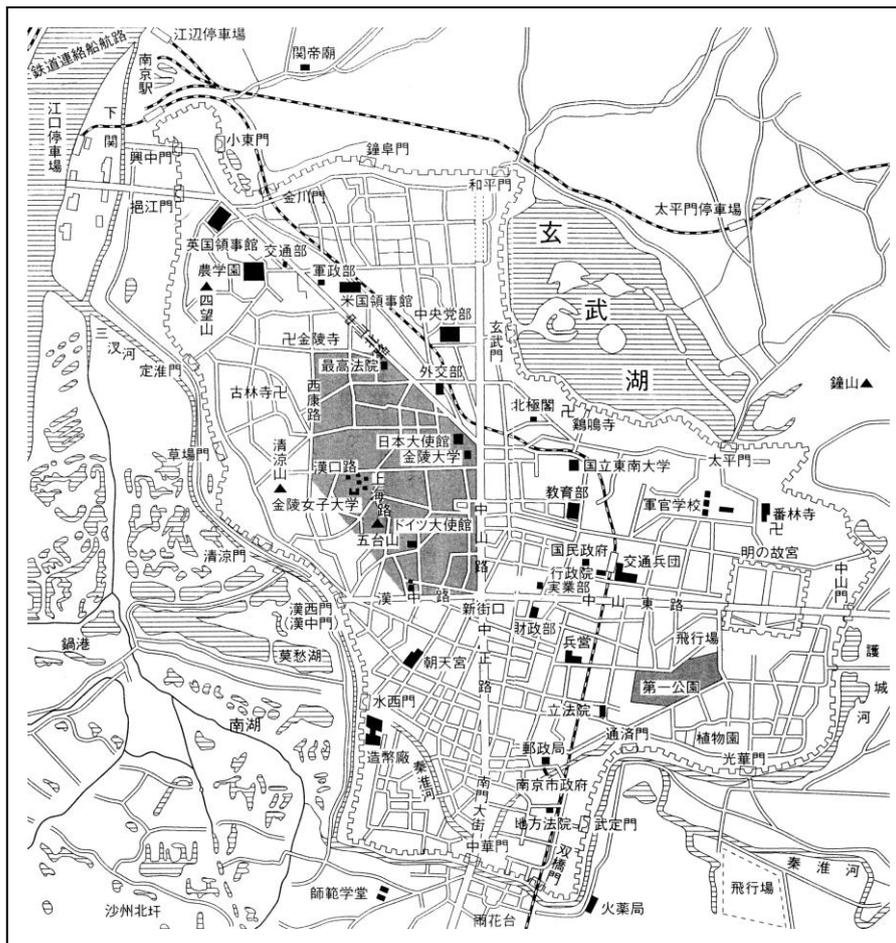
この日本側の基本方針は、1938年1月10日に国際委員会のスミスから南京に復帰したアメリカ大使館のアリソン書記官に出された手紙の一節に述べられているものである。この約束は守られ、スミスは**12月20日付の家族へ書いた手紙**で次のように言っている。

12日は安全区に砲弾は落ちなかったので、この日の私の着弾地図はきれいだった。それが一晩中砲声が出ているなかを平和裡に寝ることができた一つの理由だ。我々は

日本軍砲兵が安全区に砲弾を撃ち込まないことを絶対的に信じていた。(245頁)

なおここで、南京についていくつか基本的なことを確認しておこう。地図にみるように、南京は全長 34 キロに及ぶ城壁で囲まれた都市である。丁度山手線の長さと同じであるので、山手線内が南京城内と考えてよい。面積は 40 平方キロメートルで、ニューヨークのマンハッタン島の 70% ほどの広さである。城門は 13 か所あり、城門を通らないと中には入れないようになっていた。安全区は、面積が 3.9 キロ平方メートルで、東京で最も小さい中央区の半分ほど、ニューヨークのセントラルパークと同じくらいの面積であった。上海での戦いが始まる前には南京の人口は 100 万を数えたが、上海からの戦火が迫る形勢になると人々は市外に脱出し、11 月 28 日の王固磐警察長官の発表によると人口は 20 万人に減少していた。12 月 8 日の唐生智南京防衛軍司令官の厳命により（注 4）、この 20 万市民は全員安全区に避難したのである。しかも、”Documents of the Nanking Safety Zone” の記録では、陥落の翌年 1 月 14 日には人口が 25 万人と記録されている。従って、30 万人虐殺など起こりうる環境ではそもそもなかったのである。

南京全図



『東洋史大辞典』（昭和 13 年、平凡社）を基に作成

南京陥落後の第一報

12月13日に南京が陥落したとき、5名のアメリカ、イギリスの報道関係者がとどまっていた。しかし陥落後は通信手段が無くなったと考えた彼等は、12月15日午後アメリカ砲艦オアフ号に乗艦して、自発的に南京から退去してしまった。そのとき、シカゴ・デイリーニューズのスティール記者は、ベイツから上海のアメリカ総領事館に宛てたメモを預かった。(注5)それはアメリカ国務省に転送され、その内容はニューヨークタイムズのダーディン記者等にも伝えられた。このメモのことは、ティンパーリー編の『戦争とは何か』に筆者を隠して掲載されているが、その後作者はベイツであることが、明らかとなっている。(注6)このメモを参考としてこれらの新聞に掲載された記事が12月16日、17日のこれらの新聞紙面を飾って、それが日本軍による暴虐事件の第一報になった。(注7)このときのベイツのメモ(南京情報—1937年12月15日)は次のように報じている。

南京では日本軍はすでにかなり評判を落としており、中国市民の尊敬と外国人の評価を得るせつかくの機会さえ無にしてしまった。中国側当局の不名誉な瓦解と南京地区における中国軍の壊滅によって、ここに残った多くの人々は、日本側が高言している秩序と組織に応じようとした。日本軍の入城によって戦争の緊張状態と当面の爆撃の危険が終結したかと思えたとき、安心した気持を示した住民も多かった。少なくとも住民たちは無秩序な支那軍を恐れることはなくなった。実際には、支那軍は市の大部分にたいした損害も与えずに出ていった。

しかし、2日もすると、たび重なる殺人、大規模で半ば計画的な略奪、婦女暴行をもむ家庭生活の勝手きわまる妨害などによって、事態の見通しはすっかり暗くなってしまった。市内を見まわった外国人は、このとき、通りには市民の死体が多数ころがっていたと報告している。南京の中心部では、昨日は1区画ごとに1個の死体が数えられたほどで、死亡した市民の大部分は、13日午後と夜、つまり日本軍が侵入してきたときに射殺されたり、銃剣で突き殺されたりしたものだった。恐怖と興奮にかられてかけ出すもの、日が暮れてから路上で巡警につかまったものは、だれでも即座に殺されたらしい。その苛酷さはほとんど弁解の余地のないものだった。南京安全区でも他と同様に、このような蛮行が行われており、多くの例が、外国人および立派な中国人によって、はっきりと目撃されている。銃剣による負傷の若干は残虐きわまりないものだった。(4頁)

このベイツのメモが真実を伝えているとしたら、彼は南京事件の最初の目撃証人となるわけである。彼は12月13、14日の2日間に、日本軍が行った安全区内外での大量殺人が自分及び外国人によって目撃されたと言い切っているからである。それでは、その13、14日の2日間に他の外国人はこのような大量虐殺を果たして目撃していたのであろうか？

スマイスの家族への手紙とアイリス・チャン

スマイスは、国際委員会の秘書（事務総長）として、日本軍や日・米両大使館への文書発行の責任者の役割を果たした主要人物だった。彼は南京陥落の **13日の朝 6時頃から 8時過ぎ**まで単独で安全区の中や更に南の方面を巡回したが、人々の混乱は全く無かったので、**12月 20日付の家族への手紙**で、次のように書いている。

（12月13日、月曜朝）寧海路に戻る途中の我々の安全区を示す旗の位置が間違っていることを人々に告げて直させた。金陵女子文理学院の近くで、道路に脱ぎ捨てられた軍服があったので、警官らに言ってそれを安全区の外に捨てさせた。帰宅したのは8時15分にもなっていた！ 仲間は朝食を済ませていたが、私はそれから食事した。彼等は外がとても平和だったことを喜んだのである。（255頁）

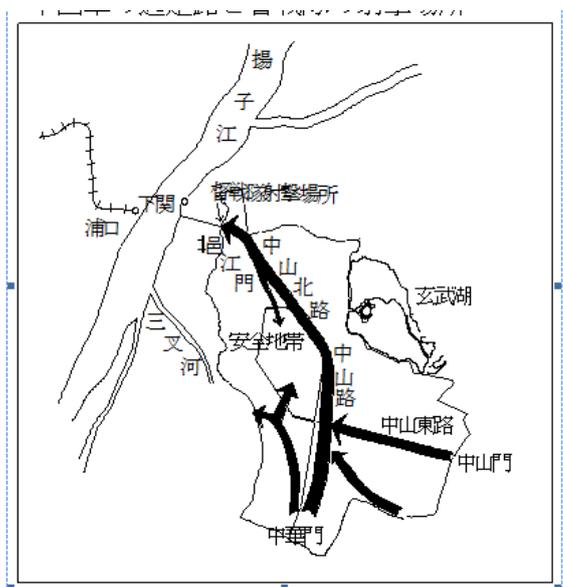
日本軍の攻撃は13日早朝まで続いていたが、この文章によって、城壁が占領され退却して行った中国防衛軍がいなくなったあとの安全区はまことに静かになっていたことがわかるであろう。

ところが、この時のスマイスは、静かになる前に中国兵の脱出路となった中山路から挾江門、下関、揚子江に至る地域で起きた惨劇を詳しく知らなかった。しかし読者は、**12月12日午後から夜にかけて**、日本軍が現れる前の南京城内外で無数の中国兵が射殺され、焼死、溺死した様子を知っておかなくてはならない。アイリス・チャンの『レイプ・オブ・南京』さえも無視できなかったその実情を、同書から引用する。（ペンギンブック 76～77頁より抜粋）

当然のことだが、退却命令は支那軍を大混乱に陥れた。将校の中には、市中をめぐら滅法走り回り、行きかう者誰にでも出て行くよう言う者がいた。言われた兵士は逃げた。誰にも、自分の部隊にも言

われない将校もいた。代わりに、彼等は自分だけ助けたのである。彼等の兵士は日本軍と戦い続けた。他の軍服姿の部隊が逃げるのを見て集団脱走と考え、それを止めようと逃走する同輩を何百人も機関銃で倒した。急いで混乱しながら町を抜け出す騒ぎの中で、少なくとも1台の戦車が邪魔になる中国兵を数知れず下敷にし、手榴弾で爆破されてやっと止まったのだった。

中国軍の逃走路と督戦隊の射撃場所



こんな悲劇の中に、喜劇的瞬間もあった。兵士たちは、市民に紛れ込んで捕まるのを逃れようと必死の余り、商店に押し入って平服を盗み、外で軍服を脱いだ。間もなく町中は半裸の兵隊たちだけでなく半裸の警官でも充満した。彼等は兵士と間違えられないよう、制服を手放したのである。下着だけを身に付けたシルク・ハットをかぶってうろろする男もいた。多分裕福な政府高官の家から盗んだのだろう。退却の初期段階、まだ秩序らしきものが残っていた間、支那軍全員が軍服を切り裂き、平服に着替え、しかもなお隊列組んで行進することを同時に行っていた。だが退却が総崩れになると、平服の奪い合いは深刻化した。兵士たちが歩行者に飛び掛って着物を奪う光景も見られた。

日本軍に遭遇することなく安全に町から出る方法が一つだけあり、それは揚子江の北港を通じてで、そこにはジャンクの一団が早いとこ辿り着ける人々を待っていた。港へ着くには兵士たちは先ず中山路の大動脈を上り、水門と呼ばれる町の北西の門(挾江門)をくぐって、初めて下関郊外の北港に入ることが出来るのだ。

夜が更けるにつれて、兵士たちは自分等がわたることに焦点を絞り、戦車や装備は放棄した。船は少なくなると、様相は凶暴性を帯びた。ついには数万人が2、3隻の船を争って、自分が乗ろうと戦い、あるいは空砲を放って他人を除けようとした。船員たちは怖がってジャンクやサンパンの船縁にすがりつく兵士の指に斧を振り下ろして押し寄せる暴徒を追い払おうとした。

その夜、川を渡ろうとして数知れぬ人々が亡くなった。門を潜ることも出来ない人々も多かった。その夜、中山路で火事が発生し、炎は弾薬の山を舐め尽くし、家々と車両を飲み込んだ。交通に巻き込まれた馬が狼狽して逆立ちとなり、暴徒の混乱を増幅した。恐れおののく兵士たちは前方へと波を打ち、その勢いで数百人を炎へ押しやり、さらに数百人をトンネルへ追い込んだが、その多くはそこで他人に踏みつぶされたのだった。門が閉じられ、大火災がすぐそこに迫り、暴徒から抜け出せた兵士たちは壁を登って越えよう、と殺到した。数百人が洋服を裂いて紐にし、ベルトやゲートルとなって縄梯子を作った。1人、また1人、彼等は胸壁をよじ登り、ライフルや機関銃を欄干から落とした。転がり落ちて死んだ者が多かった。

アイリス・チャンは、このように支那軍の混乱振りを非常に詳しく書いているので、読者は南京が陥落してから発見されたこの一帯の多数の死体は、決して日本軍によって虐殺された人々ではなく、統制を失った支那軍が自ら招いた悲劇によることがわかるであろう。これを読めば南京陥落後に日本軍に焼かれたと称して鼓楼病院を訪れた住民の被害者の真実も明かされていることになる。更にこの混乱のとき、群集の中に一般住民は1人もいなかったことも、この文章で明かされているので、その点も充分心に留めておいて頂きたい。このようにスマイスの手紙とアイリス・チャンによって、**12月12日夜から13日朝にかけての南京内外の様子**がはっきりしたのである。

では、**12月13日午前中の静かな安全区**が、日本軍の入城によってどのように変化したかを書いているスマイスの手紙に戻ることにする。国際委員会のオフィスに一旦戻ったスマイスは、昼食のために平倉巷にあった宿舎に出かける途中で、初めて日本軍と遭遇した

ときのことを 12 月 20 日付家族への手紙で、次のように手紙に書いている。

(12 月 13 日、月曜朝) 家 (宿舎) へ戻る途中、(午後) 1 時に日本兵が漢中路に到達しているのを見つけた。我々は車でそこへ行き約 6 名の小さな分遣隊に会った。それが最初だったが最後ではなかったのだ。上海路と漢中路の交差する角で、彼等はバスを調べたが、人々を傷つけることはなかった。(255 頁)

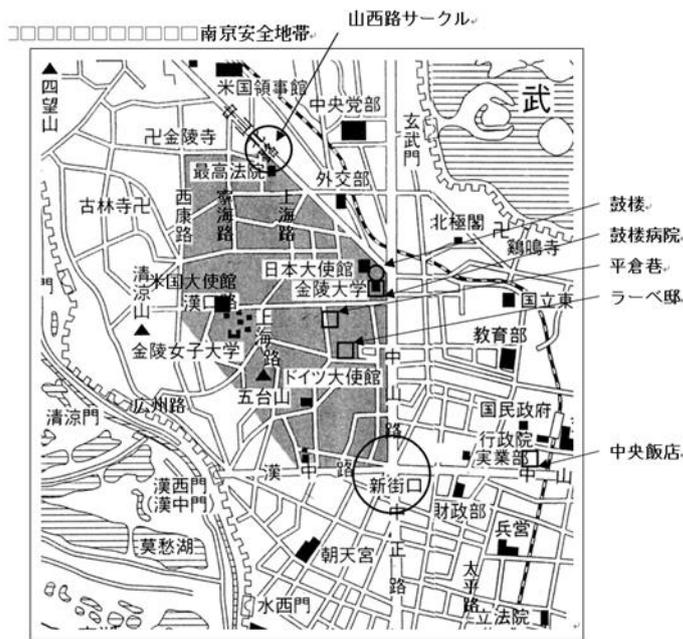
昼食後、スマイスは国際委員会の委員長であるドイツ人のラーベと通訳としての白系ロシア人コーラと共に、日本軍の高級司令官に以下の三つのことを伝えるべく出かけた。

安全区。

新しい赤十字委員会。

安全区に入った武装解除された兵がいるという事実のこと。(255 頁)

このうちの赤十字委員会とは国際委員会が中国軍負傷兵のための病院を設置しようと、マギーを委員長として作ったものである。ここでは 3 番目のことについて説明する前に、



この文書を日本軍に渡した時の様子を見ることにする。そこは新街口に近い漢中路でのことだった。スマイスの同じ手紙でこう書かれている。

(12 月 13 日、月曜朝) 確かに、約百人の先遣隊が道路の南側に腰を下ろしており、その反対側では沢山の支那人の群集が彼等を眺めていた。私達は将校に対して安全区を説明し、彼の南京の地図にそれを書き入れた(彼の地図には安全区は示されていなかった)。彼は日本兵を攻撃する者がいない限り病院は大丈夫だと言った。武装解除された兵については、彼は何も言うことが出来なかった。(256 頁)

このように、スマイスが家族に書いている通り、本当の目撃証人は、入城した日本軍が、民衆に対して全く悪意がないことを感じとった人々に囲まれていたことを報じている。同じ目撃証人であっても、アイリス・チャンが書いている目撃証人は正反対の証言をしているので比較してみよう。彼女の文章は、前掲したベイツのメモから拝借したに過ぎなかつ

たことがわかる。

目撃者があとから話したところによると、日本兵は入城するや否や6乃至12人がグループとなって城内を歩き回り、目に入った者は誰であろうが発砲した。明らかに背中から撃たれた老人は舗道にうつ伏せに倒れていた。日本兵が近づいたときに走ったというだけで殺された市民が、殆ど1ブロックに1人は横たわっていた。(前掲『レイプ・オブ・南京』82頁)

アイリス・チャンは、このときの日本軍を戦車、大砲とトラックと書いて、いかにも大部隊が侵入したように描写している。スマイスの記述からして明かに本当ではなかった。

さて、武装解除された兵について説明しよう。それには、**12月14日**に国際委員会から日本軍に渡された手紙を読むとよい。

昨日午後、多数の支那兵が市の北部に追いつめられたとき、予期せぬ事態が起きた。何人かの兵が我々の事務所に来て、人道の名のもとに嘆願してきたので、彼等を助命したのである。我々の委員会の代表が貴司令部を見つけるべく試みたが、漢中路にいた大尉のところから先へ行くことは出来なかった。そこで我々はこれらの兵士をすべて武装解除し、安全区内の建物に收容した。我々は彼等が望む平和な市民生活に戻ることが出来るように貴軍の慈悲深い許可をお願いする。

(”Documents of the Nanking Safety Zone” 第1号文書)

このように委員会が武装解除したのは日本軍に降伏した兵士ではなかったから、国際法上は日本軍の捕虜とはいえないことがわかっていたので特に慈悲深い解放という処置を期待した。この点も重要なポイントである。また、ここには人数の明記がない。

再びスマイスの**12月20日付の手紙**を参照する。それは彼が新街口で100人の日本軍に会ったあと、委員会本部へ戻る途中のことである。

(12月13日、月曜朝) 中山路には、敗走した兵達の武器が散乱していた。山西路サークルに近くなったとき、或る光景に驚かされた。さまざまな衣服を着て自動車を取り囲んだ群集が、角を曲がってやってきたのである。それは、車に乗ったリッグスが、武装解除した兵達のグループを法学院に連れてゆくところであることがすぐ分かった。彼等は自動車を包むようにしていた！ サークルでは、武装した一隊にも会った。我々は武器を捨てるように彼等に言ったところ、何人かはそれに従った。

午後4時頃、国際委員会の本部では、スパーリング(ドイツ民間人)と他の人々が群集の武装解除をしていた。この場所は、武器庫のようにになっていた。彼等は、近くの警察本部に行進して行った。凡そ全部で1,300人の彼等の中には、まだ軍服を着ている者も何人かいた。(256頁)

以上のように、12月13日に安全区を動き回っていたスマイスの関心は敗残兵の問題で

あった。日本軍による中国人への殺害も、略奪や強姦などの残虐行為も全く目撃したことはなかったため、それについては何も触れられていないのである。しかし、前掲したベイツのメモに「2日間のうち」に日本軍による暴行があったとあるからには、12月14日の実情も知らなくてはならない。

12月14日の安全区

14日火曜日の朝、我々は目覚めて戦いは終わったと感じていた。(257頁)

とスマイスの12月20日付家族への手紙にある。我々のなかには、当然のことながら同宿していたベイツもいたはずである。そこで彼が前掲したメモに残した「一般人の死者の大部分は、12月13日の午後と夕刻に行われた射撃と銃剣による犠牲者だった」との悲惨な状況は、ベイツが実際に目撃した体験ではなかったことになる。すなわちベイツが純粋に造作したプロパガンダであったことになる。アメリカ人の誰1人もそんな惨状は見えていなかったのである。もし他のアメリカ人達がベイツメモのような様子を知っていたならば、決して単純に「戦いは終わった」とは考えず、難民の将来が心配だった筈である。彼らは狭い南京城の中にいて、しかも国際委員会として行動をほとんど共にしていたのである。だからこそ、スマイスは「我々は」と書いたのである。しかもスマイスは、更にこのとき、先程に続いて、

今は日本軍がいる。秩序ある体制と順調な事態が作られて、状況はバラ色になるだろう。(257頁)

とまで書いている。まるで、日本軍の立場に立って書いているかのように思う人もいそうなくらいであるが、事実は家族に正直に状況を説明しているということである。別にことさら作り事を言う必要はないからである。それに反して、この時点で早くもベイツが日本軍の暴虐を主張していたのだから、彼は明らかに事実とは全く異なるプロパガンダを行っていたと考えるしかない。事実、彼は蔣政権の顧問であることがすでに述べたように判明しているのである。事実を歪曲、造作してでもアメリカ中に日本軍に対する悪評をひろめる意図があったと思ってよい。

そこでここから、12月14日の南京の様子を、スマイス、フォースター、マギーの3人のアメリカ人の手紙から更に詳しく調べることにする。

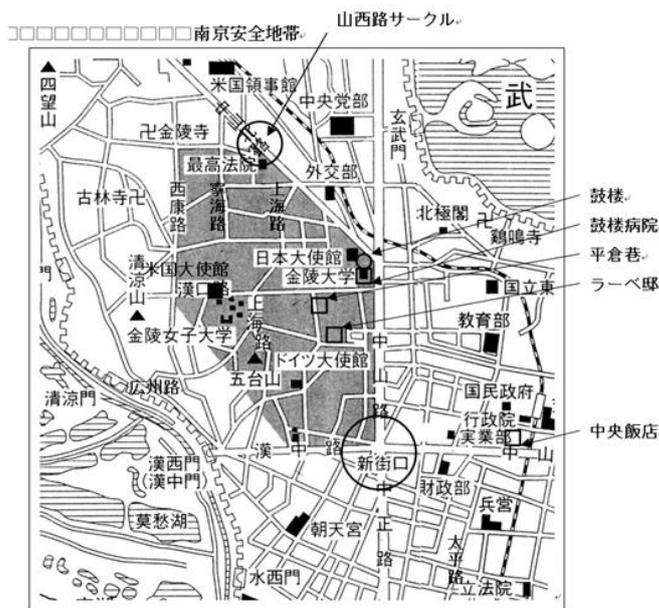
スマイス：

前掲した12月14日付の日本軍司令官に宛てた手紙を持って、スマイスはラーベとフォースターと共に先ず日本の外交官に会った。12月20日付家族への手紙に次のように書いている。

(12月14日水曜日、朝) 我々は新街口の福田(注8)のもとへ走った。彼は日本大使館員である。彼は我々を中央飯店の将校に会わせた。我々は割れたガラスと砂の上を歩いて寝室へ行ったところ、将校は半分服を着ただけで、あごひげを生やした表情のない顔つきで我々と会った。彼は上官の将校はまだ来ないと答えただけだった。彼等は南京を陥すのに大きな犠牲を払ったし、支那軍が民衆を撃ったのだと言った。そうだったのか! これらの日本人は自分自身の宣伝を信じている。(258頁)

このときスマイスは、日本側から支那軍が支那人を殺したと聞かされて、西欧人の常識外のこととして非常に驚き、そんな話は日本軍のプロパガンダと思ったようだ。しかし、既に前掲したアイリス・チャンの文章を読んだ読者は、これを事実あった混乱であると受けとめるだろう。このとき将校に渡された手紙は、前述した通り(第1号文書)、国際委員会が武装解除した敗残兵に対する寛大な措置を願う内容だった。

このあと、3人は安全区外の商業地域を廻ったが、勿論難民の姿はなかった。その様子はフォスターの手紙の方が詳しいので、あとで示す。ここでは彼等が会った敗残兵についてのスマイスの手紙の続きを記すことにする。



我々が戻ってくる時、我々の家のすぐ近くで、漢口路を50人が縛られて連行されてゆくのを見た。我々は兵達と論争した。最後にフォスターが彼等のところに留まった。私はラーベと会いに引き返し、首都飯店に出かけた。そこへ着いたとき、将校は忙しくて会えなかったので新街口に行ったが、将校は興味を示さなかった。中山路に引き返したとき、この人々はS.C.S.銀行から横切って漢口路の角に着いていた。我々が更に議論しているとき、1人の将校が車でやってきて止まった。

彼は再び私たちを新街口についたばかりの他の将校のところへ連れて行った。しかし彼は、司令官が来る明日まで待てと言った。我々はこれらのすべての人々に、日本語で書いた我々の手紙を見せて、安全区、武装解除された兵隊、そして赤十字について説明した。日本軍が見たすべての人々は武装解除された兵達だった!(258頁)

スマイスがここでわざわざ「武装解除された兵士」と書いているのは、この50人は市民

の服を着て逃げようとしていた兵士だったことを意味している。

スマイス等が、敗残兵の先行きについて心配する心情は理解するが、2 国の軍事上の争いの上での処理について、外交権すら持たない私的機関が介入することは、国際慣習としても出来ないことである。本来は戦争捕虜ではなく、外国人によって武装解除された敗残兵であるので、その処置に対するこのような申し入れは日本軍に無視されても仕方がないことである。

それよりも、この文面で重要なことは、スマイスの目には虐待されている難民の姿は全く見えていないということである。もし、難民虐待が行われていれば、敗残兵よりもそちらへの関心が先行し、記述に出てこないとどうみてもおかしいからである。ベイツは、「13 日夜から 14 日にかけて度重なる殺人などが、歩き廻っていた外国人によって観察された」と書いているが、いったいどの外国人が観察したと言うのか。全くの悪質なプロパガンダにすぎない。それを証しているもう 1 人のアメリカ人の手紙がある。

フォースター：

スマイスと行動を共にしていた**フォースターの妻への 12 月 13 日の手紙**には、

南京は陥落した。私たちは皆無事で、怪我人や窮乏している人々の世話で忙しい。私達は国際委員会を組織した。心配しないように。（118 頁）

としかないが、**15 日の手紙のなかに、14 日の巡回中の記事**がある。

昨日は忙しかった。我々3 人の外国人と中国人通訳は、国際安全区と赤十字委員会について知らせようとして、日本軍の最高級将校を探していた。彼はセントポール教会の近くのホテルにいたので、私達はその近くの様子を車で見て廻った。教会は無傷だったが、何枚かの窓は破れ、塔の下の扉も同様だった。1 発の砲弾が正面の門に落ちて、建物に損害があった。私は中に入らなかったが、幸いにも焼失は免れていた。（118 頁）

ここにも見るが如く、やはり安全区の内外共に日本軍によって追い回され、残虐行為を受けている一般民衆の姿などはない。フォースターは続ける。

安全区は理想的ではなかったが、間違いなく無数の生命を救った。最も激しい砲爆撃を受けたのは市の南部だった。しかし昨日私達が路上で巡回中に見た死体は 25 以下だった。安全区の人口は土、日、月曜（12 月 11、12、13 日）に激増し、少なくとも 10 万人はいるだろう。（119 頁）

このときフォースターは、安全区の人口を 10 万と見積もっているが、実際には約 20 万人の人々が集まっていたことは、多くの記録に残っている。ここで我々はこの日のフォー

スターが巡回中に見た死体は 25 以下だったとの記事に注目しなくてはならない。この僅かな人数さえも入城後の日本軍に殺されたのだろうかと問われたら、その答は「ノー」である。

実はスマイスが 12 月 13 日にベイツと共に街へ出て、まだ日本兵に出会う前のことである。彼は早くも死体を見ている。スマイスの 12 月 20 日付家族への手紙で次のように書いている。

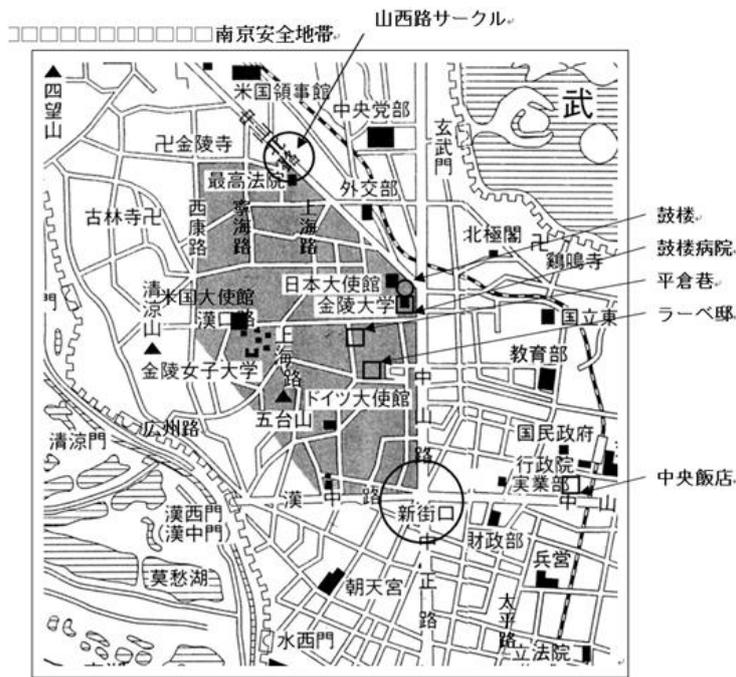
(12 月 13 日、月曜日、朝) 我々は上海路を南下していったが日本軍は見なかった。神学院の近くで、約 20 人の市民の死体があった。あとから聞いたところでは、彼等は走ったために日本軍に殺されたということである。それはこの日の怖ろしい物語だった。(256 頁)

スマイスはこのとき迄に安全区内で全く銃声を聞いたとどこにも書いてない。またアメリカ人のすべての記録に、13 日になって銃声を聞いたとの記述はない。それなのに、何故スマイスはこのように信じてしまったのだろうか。先に示したベイツのメモを思い出すならば、スマイスの「あとから聞いたところでは」の文章からすると、ベイツが彼等の宿舎で「入城直後から日本軍が住民を殺している」との噂を流していたことが想像される。ともかく「恐ろしい殺害」をスマイス自身実際には見ていないのである。

この死体についてマギーの手紙も読んでみよう。12 月 12 日の妻に書かれた手紙である。この頃のマギーは、前線から運ばれてきた負傷者を病院へ運ぶべく市内を動き廻っていた。マギーは次のように綴っている。

そして、昨日 (12 月 11 日土曜日)、私は鼓楼病院の救急車でキャピトル劇場の応急手当室へ何人かの負傷兵を連れて行きました。私の到着直前に、大きな砲弾が道に落ちて 11 人が死亡しました。福昌飯店の前のキャピトル劇場の向かい側で忽ち 2 台の自動車が燃えました。私と負傷兵は日本の爆撃機から逃れたのですが、すぐ近くの対空砲火が激しく射撃していました。私は、できるだけ早くその場を離れて病院に戻りました。間もなく、何人かの人がやってきて、沢山の難民が安全区の内側で負傷していると告げました。私達は、今度は救急車とフォードで裏通りを通って行きました。大学内の中学校を過ぎて漢中路へ着く前に、沢山の死体が横たわっているのを見たのです。1 軒の家が砲弾に直撃され、20 人近い人々が死亡しました。7、8 名が道に投げ出されていました。顔面に大きな穴があいた 33 歳の息子の死体であり、傍らで可哀想な老夫婦が悲嘆にくれていました。彼等はただ悲しむだけでした。沢山の人が物珍しそうに周りに立っていたので、直ちに立ち去り身を隠すように言ってやりました。支那の群衆はこのようにことに誠に無知です。いつ他の砲弾が飛んでくるか危険なのです。(下線筆者) (168 頁)

まだ砲撃が続いていた11日にマギーが遭遇した「20人近い人々」の死体のあったあたり



りが、13日にスマイスが20人の死体を見たところだった。スマイスが日本軍と出会ったのは、そこから更に南の新街口である。このようにスマイス、フォースター、マギーの3者の記録を比べて見ると、南京入城直後から日本軍による虐殺が始まったというベイツ説の嘘がはっきりしてくる。

尚、このような安全区への着弾は皆無でなかったことは間違いない。しかしそれは陥落前の戦闘時の「それ弾」で極く僅かだったことが、12月14日の国際委員会から日本軍司令官に出された手紙の冒頭の言葉でわかることを明らかにしておきたい。

員会から日本軍司令官に出された手紙の冒頭の言葉でわかることを明らかにしておきたい。

1937年12月14日

司令官殿

私共は、貴軍砲兵が安全区を救った立派な行為に感謝し、中国市民と安全区を世話する将来の計画のためにご連絡します。（"Documents of the Nanking Safety Zone 第1号文書"）

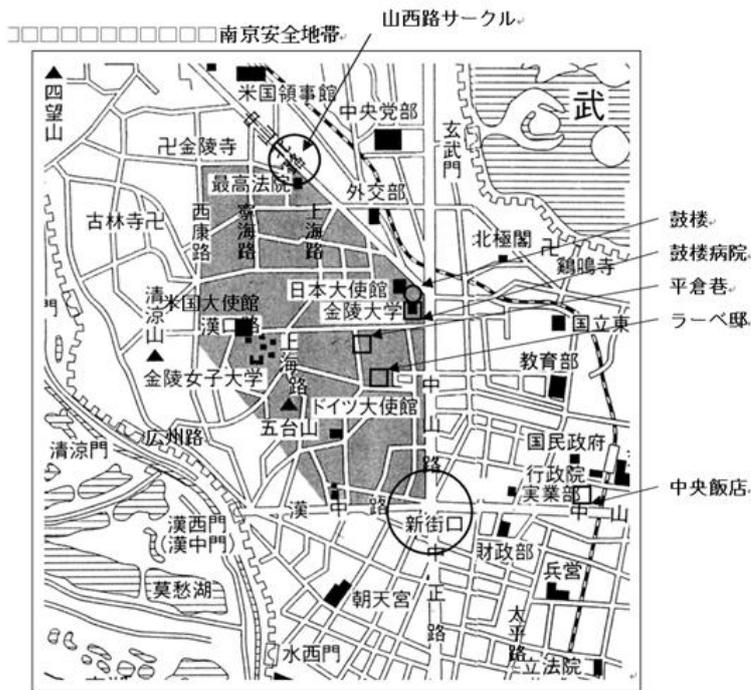
マギー：

マギーは、南京防衛軍の野戦病院になっていた国防部の建物から外交部への傷病兵を移送しようとしていた12月14日の活動振りを12月5日の妻への手紙で書いている。

次の日の朝、私は負傷兵を満載して外交部へ救急車を走らせた。私達が担架の兵と共に歩くことのできる負傷兵を助けながら一歩踏み出そうとしたとき、何人かの野獣の如き一隊の日本兵がやってきた。私は最も苦痛の激しい可哀想な男を助けていたが、1人の兵が私から兵を引き剥がし、その傷ついた腕をひどく捻り、両腕を縛って他の負傷兵と繋ぎ合わせた。そのとき、運よく通りかかった日本の軍医に、これらの人々の血で染まった衣服を示した。彼はドイツ語を話したので私は片言のドイツ語でここは負傷兵の病院だと言ったところ、彼は兵士を放免させた。私は英語を話す上品な陸

軍大佐と会って、傷兵を看護する許可を得るために司令部に行きたい旨を告げたところ、彼は私と若いロシア人とを私達の救急車（紅卍字会から借りた）で司令部に送ってくれた。私達は moral endeavor 西の中央飯店に行き、とがった頭と濃いあご鬚の小柄な男と会った。

国防部には沢山の傷兵がいるので、彼等を外交部へ移す許可を得たいと申し入れた。



彼は市内の最高指揮官が
いる次の部屋に入ってい
き、私は数日待たなくて
はならないと返事を指摘
された。私は何日も彼等
は手当を受けておらず、
水を運ぶ者すらいないと
言ったが、待てとのこと
だった。私達は失望して
去った。私は安全区委員
会の本部へ戻り、その
沢山の傷兵を2回外交部
の負傷兵病院に運んだ。
そのたびに私は兵隊とト
ラブルに会った。私が会
った車に乗った上級将校
の何人かは、私が負傷兵

を運び出しているのではないかと危惧したのだった。しかし私は、彼等を遠くへ連れ出そうとしているのではなく、病院へ運んでいるところだと伝えた。彼等はまだ1回運ぶことを許してくれた。2回目の運搬のあと、戻ってくるときに入口の門のところで、我を忘れたようにカンカンに怒っている将校に会った。私はこれまでそのような人間に あったことはなかった。彼の話し方は犬が吠えているようで、彼の形相はもし私が燃えやすいものなら、忽ち燃え上がってしまいそうだった。彼はコーラに、このアメリカ人（私のこと）を2度とこのあたりに来させるなどと言った。アメリカ人は非常に悪い、と。コーラは、「私達はもう2回移動する許可を貰っています」と言い、彼は「自分は市の指揮官だ」と言い返した。大変な困難があつて、私達は救急車を取り戻すことができた。（170-171頁）

このようなマギーの行動を何故ここで詳しく書いたのか、二つの理由を示そう。

第一にこの頃のマギーの関心はあくまでも負傷兵にあり、いくら安全区の内外を動き回っても、難民が日本軍によって迫害されているとの意識は全く無かったことを明らかにしているからである。この点はスマイスやフォースターと同じであつて、ベイツの言うような陥落後「2日のうちに」激しくなったという日本軍による殺害を初めとする暴行に触れ

ることが皆無であることは、そのようなものは無かったことの証明である。

第二に、マギーが傷兵を運び込んだ病院は、日本軍によって保護されていたことである。この機会に彼等もやはり虐殺されてはいなかったということを明かしている重要な事実を示しておく必要がある。このときから1ヶ月近く経った**1938年1月11日のマギーの妻への手紙**には次のようにある。

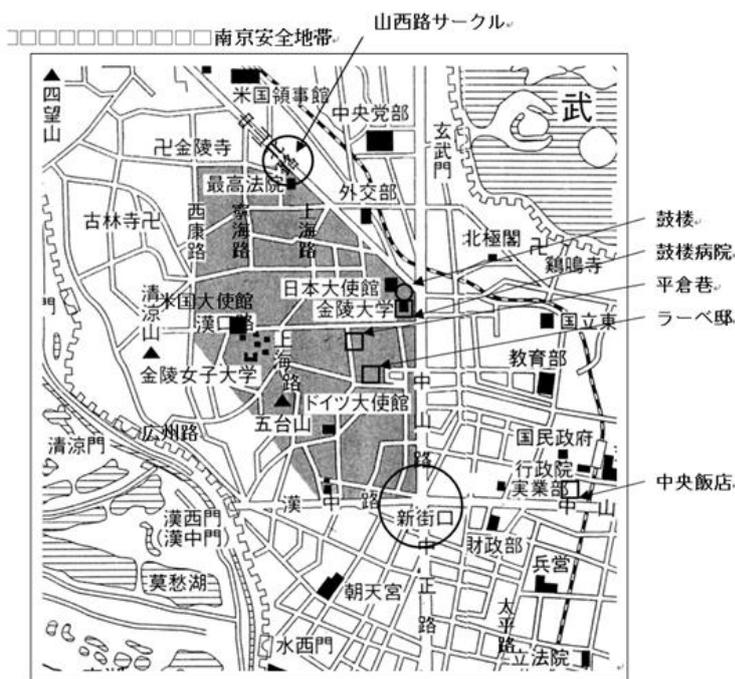
私は外交部の負傷兵のための国際赤十字の医者と看護婦から、私が3台のトラックで負傷兵をそこへ運んだ12月14日以来、外国人は誰一人入ることを許されていないものの、男性も女性も保護されていると聞いた。(189頁)

この病院はフォースターの**14日の妻への手紙**にある通り、日本軍に接收されていた。病院内に敗残兵が逃げ込んでいるのではないかと考えられる以上、接收するのは当然の措置であった。

私達は、負傷兵のための赤十字病院として、外交部に集中させることを決めた。しかし昨日日本軍がそれを接收し、誰も出入りすることができない。私達はただ中にいる人々の運命を祈るしかなかった。(119頁)

しかし彼等はマギーが手紙に書いている通り、日本軍によって保護されていたのだった。この事実をとっても「日本軍による大虐殺」とは、全くのフィクションであることがわかるだろう。(注9)

ヴォートリン：



ここでもう1人、ヴォートリン女史の体験を紹介しておくことが必要だろう。その日記(『南京事件の日々』53～54頁)によれば、**12月14日午後4時30分**にミルズの車に同乗して、教会信者の家の安否を確かめるために、安全区を出て南京城南部の水西門まで出かけている。信者の家には全く異状はなく、その帰途に安全区の上海路に面したヒルクレスト学校附近の路上で死体を一つ見ただけで、凄まじい砲撃があった(もちろん陥落前の戦闘時のことである)割に

は死者は少なかったとの感想を書いている。彼女も長時間のドライブをしたが、日本軍による暴行は全く見ていなかった。ベイツの言う外国人の証人は一体どこにいたのだろうか。少なくともこの2日間、日本軍と一般住民との接触は全く無かったのであるから、日本軍による暴虐を伝えたベイツのメモは完全なプロパガンダであることが立証されていると繰り返し指摘しておこう。

南京陥落後3日目

12月15日午後5時に5人の外国人通信員が南京を離れた。彼等はベイツから渡されたメモに基づいて、それまでに日本軍が南京市内を荒らし回っているような記事を書いている。しかし彼等は南京城内を抜けて自動車を進めているときに、何呟にも重なった死体の上を通ったように描写したのみで、日本兵の難民への殺人、暴行現場を見たと書くことはなかった。前述したアイリス・チャンの叙述にあるように、記者等が見た揚子江に向かう道路に散乱していた死体は日本軍に殺されたのではなく、大混乱に陥った支那軍兵士が自軍に射殺されたり、大火災で焼死した人々だったのである。

12月15日に国際委員会から日本側に渡された文書も、日本軍の暴虐については全く触れていない。その内容を示すかわりに、この文書の制作者であったスマイスの家族への手紙を見てみよう。

(12月15日、水曜日、朝) 武装解除した兵について、人道と戦争法規を認識させるとの2点で理論武装をして、司令官が来たときに会えるように出かけた。しかし手紙が出来上がる前に、安全区について知るために福田が本部にやってきた。我々は彼にすべての文書のコピーを渡し、人口、食糧供給などについての彼の質問に答えた。
(258~259頁)

これでもわかる通り、国際委員会の関心事は自分達が武装解除した兵士の処置であった。難民については日本大使館の福田氏の質問に答えただけで、彼等が日本軍の迫害を受けているとの認識は全く無かったので、そのことには全く触れていない。

更に、15日正午に日本軍の特務機関の係官と面会したときも、スマイスは日本兵の乱暴があるとは一言も言っていない。先程の手紙の続きに次のようにある。

ところで、元南京日本大使館秘書で60歳になる紅卍字会からの通訳スウエンは、この日に丁度着いた特務機関の長と正午に会えることを設定したので直ちに飛んで行った。福田が彼と共に通訳した。

特務機関の長は、市内の支那兵を調査しなくてはならないと言った。安全区の入口を整備し、人々は出来るだけ早く家に戻ることに、武装解除されている支那兵に対する日本軍の人道的な態度を信用すること、警察は警棒だけを持って安全区を巡回し、我々は安全区に持っている1万タンの米を難民に供給する。電話、電信、水道修繕のため彼はラーベと共に検査する。明日の100~200人の労働者を揃えるよう助言してほ

しいし金は払う。米のあり場所を検査して警備する。(259頁)

このあとスマイスは、彼等が**12月13日**に武装解除した**1,300人**の敗残兵が日本軍に連行されていったことを残念がって、この日の手紙は終わっている。南京市内には、兵達が軍服をぬぎ捨てて安全区内に逃亡したことが明かである以上、彼等を捕縛するべく捜索することは占領軍として当然である。スマイス等のアメリカ人も武装解除された兵士とは表現しても、このあとも含めて戦争捕虜と言うことはなかった。また、彼等の処刑についても、噂としては聞いても確認したことはなかったのである。

ベイツの嘘は戦後も続く

さてベイツのメモには、陥落後2日間に日本軍の暴行による無数の民間人犠牲者が出たようにあったが、以上紹介したように、スマイス、フォースター、マギー、ヴォートリンのこの2日間に関する記録によって、ベイツを除く他のアメリカ人はそのようなことを全く見ていなかったことが明かになった。そこで更にその後の南京の模様を含めて、以下に二つの文書を紹介しよう。その一つはベイツが1947年になって南京で国民政府が開いた**軍事法廷に提出した意見書**である。

国際安全区委員会のメンバーの報告と、国際委員会が資金を出して紅卍字会が行った埋葬記録によって、控え目な不完全ながら市民の男女と子供の死 — 最初の数週間の間日本軍による被害 — は1万2千、軍服を着ていても非武装の男3万5千であると確信する。これらの殺人のうち、90%以上が最初の10日間、そしてその大部分が最初の3日間に行われた。これらより多くの殺人があったことは確実であるが、それらは私が知見できる外で行われたので、数字を見積もることは出来ない。

ベイツ

南京 1947年2月6日

上記ベイツの主張によれば、1937年12月13日から15日の間に約3万人の敗残兵や一般人が殺されたことになる。ところがアメリカ人3人の記録が証明するように、これは全く事実ではなかったのである。

そこでもう一つ、**妻に書いたミルズの1月24日の手紙**を紹介しよう。

勿論私達はもっと以前に安全区の役割は終わるだろうと予測していた。しかし安全区は占領されるより前よりあとの方が有用だったことが証明された。戦の最中には、特に市の南部や東南部と郊外に住む人々の避難所となって彼等を保護した。そこでは最も激しい戦いがあった。しかし主要な安全区の有用性(を示すために)は、私はあなたに12月初めの頃に人々の群が安全区に入って来たときや、今の上海路と寧海路の様子を見せることが出来たらな、と思う。この2ヶ所は今や南京の繁華街になっている。以前は太平路や中山路やold Fund Dung Giaiだったがそれらの通りは広範囲に焼

ないかとの疑いを持った日本軍による学内の捜索を受けたことは事実だったが、そのときも兵達による乱暴な行為は無かった。ところが **12月17日深夜**、真つ暗闇のなかを日本兵を自称する一隊によって、少女6人が連行されていったことも事実だった。そのとき陳という学園の職員も連行されていった。ところが彼等は翌朝までに無事で戻ってきたのである。以下はヴォートリンから金陵女子文理学院理事会に提出されたレポートである。

9時から10時の間に、彼等は側門から12人の女性と少女とを連れ出し、私達のところにいた将校はMr.Chenを連行していった。彼等が去ってから、このトリックは女を連れですためだったことがわかった。私はMr.Chenは銃殺されるか刺殺されるに違いないと思って、再び会えないだろうと観念した。この最後の場面を私は決して、決して忘れることはない。メアリー（トワイネン）、Mr.Chenと私は門の近くに立ち、使用人達は私達の後にひざまずいているとき、Mr.Chenが将校と何人かの兵によって引き立てられていった。落ち葉のなかを遠くの側門を過ぎてゆく人影、誰ともわからぬその人々の低い叫び声。Mr.Chenは上海路と広東路との交差点で釈放され、6人の少女達は翌朝5時に無傷のまま戻ってきた。両方共に、祈りのお蔭だと私達は信じている。（336頁）

ヴォートリンは、12名が連れ去られたと聞かされていたが、実際は6名だった。しかも全員（ほかの6人について心配している様子がないので、実際は6人だったと分かったのだろう）が無事に戻ってきたという結末はこの資料にしかない。しかし12月17日夜にフィッチにさそわれて金陵女子文理学院に出かけたスマイスが見た「日本兵」の蛮行の記録が著名だから、映画でも取りあげられる程の大事件と受けとられている。

しかし、12月17日夜の事件はアメリカ人達に日本軍の乱暴を見せつけようとした謀略の臭いがするのである。なぜなら、もし日本軍によるそのような大強姦事件があったのなら、ヴォートリンはあとになっても以下のようなレポートを書くことはなかったであろう。

もっと貧しい人々は寝具や小銭さえも盗まれ、安全区にあってもとても安全だった裕福な家の敷物やラジオや家具も盗まれつつある。私達は、12月17日頃から1月17日迄（この日に私は最後の火事を見た）の（ような）大規模な焼却は見ない。現在の最も大きな悩み事は、「老百姓」即ち普通の人々による略奪が続いていることである。法の無い秩序も無いこの市のなかで、貧しいそして無法者は、どの家に入って欲しい物を持ってきてても全く自由だと思っている。旧安全区の外では、多くの家が戸や窓や床までもすべてが盗まれている。最近の数日中に。私は良質の戸と窓が売られているのを見ており、それは破壊が進んでいることを意味している。当然のこととして私の中国人の友達はこの件に心を痛めているが、どうすることも出来ない。（346頁）

この市の無法状態の間、キャンパスはとても平和だった。「人々」は略奪や盗みにやってくる時間が無かったのだ。私達の衛兵が1月14日にいなくなり、再び来ることはなかった。長い間私達は、何事が起きるのでないかと心配していた。しかし私達ではどうしようもない事態は起きなかった。兵士達がいたずら心でやってきたことが3

回あったが、説得されて戻っていった。私のカレンダーに、高級士官から兵士までの17グループの訪問者の印がある。彼等の多くは、キャンパスとキャンプの見学のためだった。私達は常に、最初に難民達で占領されている1つか2つの建物を見せ、そして全く普通の状態にあって検査のために開放してある図書館管理棟へ案内する。彼等はそれらを見て常に喜び、私達は彼等に清潔な建物を見せることが嬉しかった。

(347 頁)

「この期間」とは、この報告記事の表題にある1月14日～3月31日を指している。その間のキャンパスは平穏だったことがよくわかる。また、「人々」、即ち難民が略奪犯人だったこともこの文によって明らかになっている。日本兵による虐殺も強姦も無く、略奪の犯人さえ難民となれば、ベイツのメモや法廷に提出した証言の信憑性は全くなくなるものとなると言わざるを得ない。

兵民分離をした日本軍の実状

次に、ベイツの主張がいかにも実態とはかけ離れていたかということを示しているヴォートリンの記録をもうひとつ明かにしよう。

日本軍が占領したときの南京市内には、多くの武器、弾薬のみならず、おびただしい数の軍服が脱ぎ捨てられていた。その持ち主は、難民の服を奪うのに殺人まで犯して安全区へ逃げ込んだ敗残兵だった。近代戦では考えられないこの状況に接したアメリカ人も驚いたが、日本軍としてそれだけでは済まされず、軍服を脱ぎ捨てたこれら逃亡兵を摘出して、安全区内の平穏を保つ必要があった。そこで安全区内の難民登録を行い、その過程で敗残兵を摘出する計画が立てられた。日本軍はこの措置を兵民分離と呼んでいた。12月22日のスマイスの家族への手紙に次のようにある。

今朝、憲兵の特務機関がラーベに面会を求め、全人口の登録をすと言ってきた。彼は安全区の委員会も含まれると考えている、そこで我々は、日本軍が市の管理責任を感じ始めたための措置だろうと希望を持った。しかしこれは、「平和な市民」の登録のためだけの命令だったし、その後は登録証をもっている限りは南京に住むことが出来るというわけだった。(267 頁)

兵士と難民とを判別しようというこの方法は、日本軍が、難民を装って安全区に潜り込み、難民に危害を加える恐れのある敗残兵を摘出して、一般市民保護を行おうとしていた証拠である。しかし驚くべきことに、ベイツはこの件を日本軍による難民の大量殺害という架空物語に変造しているのである。

まず、ヴォートリンのレポートには次のように書かれている。

登録の期間：

南京に住んでいる人々の登録は南京大学で12月26日に始まり、27日に終わった。

大学のキャンパスにいたすべての男女は、これらの日に登録した。(337頁)

南京大学での**12月26日の住民登録**の様子について、スマイスは次のように手紙に書いている。

今日の午後は事務所であまりやることがなかった。苦力が登録しなくてはならないので、トラック輸送が中断されたのは間違いない。しかし人々は一旦登録という化物を済ましてしまえば、とても安心するだろう。これまでの報告では、兵士として拘束された大きな数字は中学校からの約20名だ。(276頁)

このように、スマイスが知る限り中学校から連行されていったのは20名だったが、最も難民が多かった南京大学での様子も述べられている。ここではベイツとゾーンが立ち会っていたが、1名が摘出されたものの解放され、結局日本軍に連行されていったのは1人もいなかったのである。次は**12月27日のスマイスの手紙**である。

昨夜夕食のとき、ベイツは登録が終わるまで大学に留まっていると言った。昨日は男性の登録で、初めは自発的に申告すれ仕組みだったが、この男を保証出来るかと群集に尋ねるやり方で続けられた。1人を除いて全員パスしたので、その1人をベイツとゾーンが保証した。今日は女性の登録がもっとスムーズに行われたし、明日は個人の家が対象になる。(278頁)

では金陵女子文理学院ではどうだったのか。ヴォートリンは金陵女子文理学院へのレポートに非常に詳細な記録を残している。

私達の登録は12月28日に始まったが、初め私達は私達のキャンパス内の女性達のためばかりを思っていた。しかしそれは違っていた。登録は9日間の長きに及び、男性と女性達が安全区の全域からやってきたし、田舎からさえも来た。何万という人々が4列に並び、最初に良い市民としての講義を聞き、それから最終手続きのために、**Mr.Chen Chung-fang** の家の一つに入ることの出来る用紙を貰って、名前を住所がブランクになっているスタンプと番号のある登録証が与えられた。

最初の何日かは男性に限られていた。彼等は早いときは午前2時から漢口路と寧海路に列を作っていた。そして終日彼等はキャンパスを通過して進んでいった。雪の日にこのような行進する人々による、ぬかるみのひどさを想像できると思う。この登録は最初は軍の将校によって行われた。2人の衛兵がいつもそれぞれのグループを焚き火に照らし、私達は将校のために石炭の火を提供した。初めのうちは、私は私達のキャンパスで男性の登録が行われることに抗議した方がよいと考えた。キャンパスの正面が広く開かれることを意味し、女性達のためには入ってくる男性が迷うことを排除しなくてはならないと思ったのである。

しかしながら、第1日の終わりには、この方式はベストのように思えた。男達が列

外に出されて兵士だと告発されたとき、女性達が幸いそこにて彼等のために弁護し、多くの潔白な男達が救われたからである。潔白な男達の中には、もし男達が兵士だったことを告白すれば、許されて有給労働が与えられると言われた者がいるが、私達はその頃に私達が知った漢中門外にあるという埋葬されていない死体のなかに彼等が交じっているのではないかと疑ってはいる。（注：後述するスマイスの手紙を参照）

最終的には、金陵女子文理学院での何万人という登録者のなかから、僅か28人が連行された。私は女性達がこの登録作業の進行を如何に心配して見守り、彼女達の夫や息子達のために如何に勇敢に弁護したかということを決して忘れることはないだろう。

女性達の登録は月曜日、1月3日に始まったが、水曜日まではまだ女性だけということではなく、金曜日に終わった。彼等が兵士の手荒な扱いをどれだけ恐れたことか。そして登録証を得るのにどれだけ頭をさげたことだろうか。何人かの女性達は、売春婦ではないかと疑われた。そのときは市内に日本兵のための許可済売春宿を発足させようとしているときだった。しかし女性達は自分が何者であるかを証明出来れば放免された。女性登録の最後の2日間は、民間の係員によって行われ、それは温和な規律のある方法だった。すべての記入は支那人によって行われ、すべての手続きは私達のキャンパスの中庭で続けられた。私は、私達の雇員や女中の手続きを別途に進める許可を貰って、登録は速やかに終わった。そして皆が恐れていた苦難は過ぎたのだった。

(337～338 頁)

ヴォートリンのレポートによって、何万という男女の難民登録は、難民にとって苦労は多かったが、殆ど何のトラブルもなく、平穩裡に進行したことがわかる。日本軍によつて摘発連行された者は28名に過ぎず、割合からすれば数千人に1人だった。ところがヴォートリンは、このようにして連行された者の沢山の死体が漢中門の付近で野ざらしになっているとの噂を書きとめているので、それについての説明が必要であろう。

この噂の出所を調べてみると、それは処刑から逃れて帰ってきたという男の話を聞いたというこれまたベイツからの伝聞であった。

スマイスの12月27日の手紙には次のように書かれている。

難民登録が南京大学で進行中に、彼等は200人以上の自発的に兵隊だったか又は強制的に軍によって労働させられていたことを申し出た者を獲得した。もし自発的に申し出れば、自白しないなら銃殺されるかわりに働くことを許可するとの約束があったからだ。今朝1人の男が5カ所の銃剣の傷を受けて大学にやってきた。そして、彼等のグループは古林寺の外まで行進し、そこで130人の兵士の銃剣訓練の的にされたと言った。彼は傷を受けて失神し、気がついたら日本兵はいなかった。そこで戻ってきたのだ。ウイルソンは、彼の1ヶ所の傷はひどく、生きてはおれないだろうと思っていて、この報告を受けた我々の昼食は減退した。（278 頁）

この話は12月27日の昼食ときにベイツがスマイス等に披露した伝聞によることがわか

る。なぜならばこの内容は同じスマイスの12月26日の手紙との違いが甚だしいからである。26日の手紙には日本軍による多人数の連行は書かれていない。

かかるベイツの言い分は、翌年1月25日になって公表された彼のレポートが明らかにしている。それが”Documents of the Nanking Safety Zone”に書かれている「南京大学における難民登録の結末に関する覚書」という文書である。(第50号文書)

非常に長文のこのレポートも、初めの部分では先に示した27日のスマイスの手紙に書かれている「ベイツとゾーンが最後に残された1人を保証して全員解放された。」との実態は繰り返している。しかしそのあと、突如として状況が変わったとして、日本軍憲兵による難民連行と虐殺の様子が長々と書かれている。しかしそれもベイツが「見た」のではなく、虐殺から逃れて帰ってきたという男の証言に過ぎなかった。その内容をこの50号文書の102～107頁から抜き書きして示そう。

その間に、もう一つの要素が導入されてきた。少なくともこの特別な任務のための上位にある2人の日本人将校が追加されて取り調べに来た。彼等の1人は、これまでに行われたことに激しく不満な態度を取った。この男は、前日南京大学を訪問したときも大変な乱暴振りと愚行振りを示し、我々は度々、彼のこの地区の憲兵の長としては邪悪な行為と粗野なやり方に出会うこととなった。午後5時頃、2～300人の男子が二つのグループにされ憲兵により連行された。(50号文書)

このように、ベイツは登録の途中から憲兵の幹部が介入して、2～300人が連行されていたと書いている。しかしここでもまた、彼以外にその事実を記録しているアメリカ人は一人もいない。そして彼の物語は12月27日のことになる。

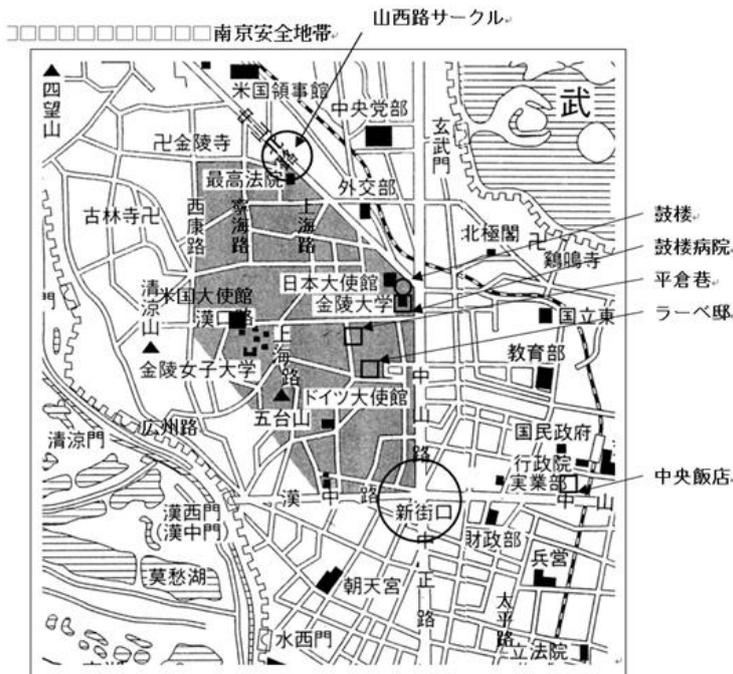
翌朝、銃剣の傷を5ヶ所に負った1人の男が大学病院に来た。この男は二つの出来事について明確に報告した。彼は難民として図書館にいた。彼は路上でつかまり、大学からのグループに加えられた、と。その夕方、西方のさる場所で、約130人の日本兵が500人の彼と同類の捕虜の大部分を銃剣で刺し殺した。意識が戻ってみると日本軍は立ち去った後であり、夜中に何とか這って戻った。彼は、南京のこの地域はよく知らなかったので、その場所については曖昧であった。また、27日朝、1人の男が私の所へ連れて来られたが、彼の言うには、前夜連行された2～300人のうち大多数が死に、3～40人が死を免れたが、自分はそのうちの1人であるとのことである。(11)

このようにベイツはこのあとにも日本兵の殺害から逃れて大学に戻ってきたという人々の話を、次から次へと長々と記していった。しかも彼の作文の狡猾さは以下の文章で明らかになる。

その男の報告と証言には、2点、追加する必要がある。赤十字の責任ある作業員は、我々に対し、漢中門の外に行き、そこの多数の死体を視察するよう求めた。国際委員会のクレーガー氏は私に、早朝思い切って門外に行ったところ、これらの

死体を見たが、城壁の方からは見えなかったと話した。その門は、今は閉められている。(同)

漢中門とは、日本軍に連行されていった犠牲者が殺されたとされている場所の近くの門で、クレーガーとは国際委員会の一員のドイツ人である。彼は門の外で多くの死体を見た



が、城壁の上からは見えなかったとベイツに報告したことになる。赤十字の作業員というのも正体不明である。しかしここには大変なベイツの技巧が隠されていることを示さなくてはならない。実際に漢中門から死体の存在を確かめようとしたのは、クレーガーではなく、ベイツ自身とスマイスだったのである。この事実を教えてくれるのは1月1日に書かれたスマイスの妻への手紙である。この日スマイスが、安全区の最も高い鼓楼の上から南京城内

を眺めて、焼失したのは全市の約10%であると見積もったあとの文章の最後に、漢中門(別名漢西門)の城壁に登ったことが書かれているので、熟読してみよう。

塔での探検をして、難民達が温かい陽射しの中で楽しんでいるし、少年達が大学のキャンパスで独楽で遊んでいるなどの様子がわかった。ベイツと私は、今週射殺された男達の死体の山があるのではないかと、金陵女子大の裏を歩いた。我々は古林寺の傍らを過ぎ南方の谷間を通り、全ての沼を調べた。しかし焼殺事件のあと数日前にベイツが見たという金陵女子大裏の焦げた1人の死体以外には何も無かった。私達は半ば耕されていた野菜畑も見つけたが、農家は荒れ果てていた。ほんの僅かの家が販売のために荷を積んでいた。安全区の外の家は空家だった。西康路の西側もそうだった。そこで我々は清涼山を通って南へゆき、漢西門の新しい門に着いた。(286頁)

ここには、日本軍による暴行とは全く無縁のように、難民の大人も子供ものんびりと新年を過ごしている情景がある。ヴォートリンのレポートで出てきた古林寺には、死体が多いとの「噂話」におびえていたヴォートリンの認識とは異なって、そのあたり一帯に死体は無かった。これだけを読んでも、ベイツが聞いたという「日本軍の殺害から逃げ帰った証人」の虚言が明かされているのではないか。そのあともスマイスとベイツとは主として安全区の外側を歩き、焼却されたり荒れた家と畑を見たが、惨殺死体に会うことなく、再び

漢西門に戻って、城壁の上に上がった。そしてこの巡回の総括として次のように伝えている。

我々の調査旅行の結果、死体の山は少なかったから、とてもよい結果であった。難民が安全区外の家に戻る機会に関する限り、展望は非常に暗い（漢西門の外の半分の家は焼かれている）。私達は城壁の上に立って廃墟を見下ろした。それは日本軍が市内に入る前に支那軍によって焼かれたのである。（286 頁）

以上のようなスマイスの手紙によって、漢西門に近い城壁にのぼったのはスマイスとベイツであって、ドイツ人のクレーガーではなかったことが明らかとなる。そのとき彼等が見たのは、城外に広がる廃墟だったが、それは日本軍によって破壊されたのではなくて、支那軍が実行したことをスマイスは書いているのである。

ここでもう一つ、読者に是非とも読んでほしいスマイスの手紙がある。**1937 年の大晦日に書かれた妻への現況報告**の一部である。

最も深刻な事態の様相として、我々が適当で速やかな解決策を見いだせない一つは、この 20 万人の社会に経済基盤が無いことである。もし彼等が日本陸軍から米を買うことになれば、彼等の金は干上がって戻ってこない。唯一の還元路は、まだそんなに多くはないが、日本軍に雇われた苦力達が僅かに得る金と、水道、電力会社に雇われた少しの人々の金だけだ。他には農民達が大地から僅かに得る収入しかない。或いは人々が市中の安全区以外の地域から見つけるか盗んでくる物なのだ。（282 頁）

道路ぎわの小さな露店商達がうまく商売しているのは注目すべきことだ。小さなリスクで大きく儲け、彼等は毎日商売に励んでいる。商品は多彩だ。我々は今、それらのあるものは安全区外の焼却が進んでいるところから盗まれてきたのではないかと疑っている。（283 頁）

陥落から約 2 週間を過ぎたその頃のスマイスの関心事は、相変わらず流布されてくる日本兵によるという根拠の薄い強姦事件以外は、難民の帰宅に伴っての生活基盤が脆弱なことであったことがわかるだろう。彼の手紙のどの部分にも、日本兵が安全区にかたまっただけで暮らしている難民の大量無差別殺害の記事は全く無い。スマイスは 1 件の虐殺も目撃したことを書いていない。目撃証人ではなかったのである。

ところが **1946 年 7 月 29 日の東京裁判の法廷**で証言したベイツは、日本軍はあくまで残酷な軍隊であったと強調する内容を繰り返した。

そこで彼の証言は事実でなかったことが彼と同宿していたスマイス、ミルズ、そして女性のヴォートリンの既に述べてきた記録と対比することによってわかるように、いくつかの例を挙げてみよう。この日の裁判速記録からの要約である。

1. 安全地帯及びその付近の城内で 12,000 人の男女及び子供が殺された。
2. 中国兵の大群は南京城のすぐ外側で降伏し、武装を解除されてから 70 時間後、すべて機関銃で射殺された。
3. 日本軍将校と下士官は、3 週間もの間、連日安全地帯に侵入し、難民の中から兵士だったと見なされる者を拉致してゆき、彼等を殺害した。
4. 兵隊達は毎晩強姦する相手を探して歩き回り、8 千人の女性が被害に遭った。
5. かかる戦慄すべき暴行は 3 週間近く行われ、その後、更に 6 週間から 7 週間にわたって強化された。
6. 南京が占領されてから 6、7 週間の間に南京市内の殆どあらゆる建物は兵士によって略奪された。例えば、ピアノを返してもらおう機会があったので行ってみたら、一つの倉庫に略奪した 2 百台のピアノがあった。
7. 民間人の虐殺、射殺、或いは強姦が行われているときも、高級士官が見物しているところを 3、4 回見たことがある。

これらの証言はすべて当時南京に在住していたアメリカ人達の真の目撃記録によって完全に否定されていることがわかるだろう。

このようなベイツの悪意に満ちた「目撃証言」と称するものに対して、東京裁判に宣誓供述書を提出したスマイスは、「連日報告されてくる日本軍によるという犯罪の事実を日・米の大使館に報告した」と書いているのみであった。それらの犯罪を目撃したとはしていないのである。ベイツが日本軍が降伏したあとになっても何故このように法廷で偽りの証言したのか理由は、彼が蒋介石政権の顧問であったという事に尽きるだろう。彼のこのような言わば詐欺行為が「南京虐殺の目撃証人」という架空の言葉を生んだ遠因と考えて間違い無い。

最近、日本を襲った大震災と大津波によって大打撃を受けた地域できえも、すべてを失った民衆が略奪に走ることもなく互いに助け合いながら整然と行動している様子は、世界中の人々に感銘を与えた。そのような人々の成長に影響を与えたその父や祖父が、南京では天災の被害者と同じように弱い難民に暴虐の限りを尽くしたと考えられるだろうか。全くもって馬鹿馬鹿しい話である。

終章

さて、実際の目撃証人スマイスやフォースター、ミルズ、マギー、ヴォートリンらが見た南京の状況を読者に伝える作業も終わりに近づいた。南京事件に関する現在の論争は、南京での日本軍による暴行を事実だったという前提の上で、殺害の被害者数は 30~40 万（中国主張）と、民衆の虐殺は殆どなかったとの日本の主張に大別される。しかし、当時のスマイスを初めとする実際の記録を検討してきた結果、ベイツに始まるプロパガンダとは全く異なり、難民の死者も強姦の被害者も、実際には殆ど無かったことが十分に理解出来るだろう。従って、いわゆる 30 万虐殺など最早論ずるに値しない大ウソと断言できるのであるが、どのようにしてこのような途方もない大ウソが生まれてきたのか、最後に触

れてみたい。

30 万人という数字が最初に世上に現れたのは、**1938 年**のティンパーリの著書の中である。

『戦争とは何か 中国に於ける日本軍の暴虐』ドキュメント記録 H.L.ティンパーリ編著 マンチェスターガーディアン紙中国通信員

その冒頭の部分に次のようにある。

「中部支那戦線の死傷者だけで少なくとも 30 万人の死傷者と同数の市民の死傷者の損害があった。」

ティンパーリ（注 10）は、オーストラリア人で長年にわたって満州、中国から報道を続けていた。南京が陥落した時のティンパーリはマンチェスター・デーディアン紙の通信人として上海にいた。1938 年 1 月、当時蒋介石の顧問として活躍していた同国人 W.H.ドナルドに招かれて漢口に行き、宣伝用資金を貰って上海に戻って反日宣伝を開始した。その後の彼は、蔣政権の顧問として、南京のベイツと連絡をとりながら、ベイツとフィッチから送られてきた書信と南京国際委員会発行の文書をもとにして、日本軍の暴虐振りを宣伝するために書いたのがこの本である。従ってその内容は、検証された事実ではなく、あくまで宣伝のためのものだったことがはっきりしてきた。アイリス・チャンが資料として重要視したのもこの宣伝本である。

そのようなティンパーリが始めて書いたのが前記の「少なくとも 30 万人の中国軍と市民の死傷者が損害を受けた」という数字だった。しかしこの場合も、中支戦線という広い範囲での数字であって南京でのことではなかった。しかも、その根拠は全く示されていないし、調査さえ行われてはいなかったから、これは単にティンパーリが頭の中ではじき出した数字に過ぎなかったことは余りにも明らかであろう。あまり中国の言葉に詳しくない読者のために、「3」は中国では単に「沢山」とか不特定多数という意味を持った数字であることを書いておこう。恐らくティンパーリは、漢口でこの意味を教えられて、この場に用いたのではないかと筆者は考えている。3 万では少ないし、3 百万では多過ぎると思っただけであろう。東京裁判での検事は、その論告に『戦争とは何か』の内容を多く引用しており、日本軍による民衆 30 万人の殺害の原点はここにある。しかしただ作られた数字だったから、東京裁判判決以後この数字は消えていた。それが復活したのは 1970 年以降に、中国が急に主張し出してからのことだった。このいきさつを知れば、読者はこの数字の持つ無意味さを容易に理解するであろう。南京の「虐殺記念館」には 30 万という数字が屋上に大きく掲げられている。

多くのアメリカの人々は、テレビでニューヨークマラソン、シカゴマラソンなどの実況を見たことがあるだろう。30 万人といえ、これらマラソン参加者の数倍にのぼる。マラソン出発直後の橋や道路を何百メートルも埋めた人々の何倍かの人数が、僅かの期間に殺され、埋められたり揚子江に押し流されたという現在の中国の主張を根拠あるものとして、宣伝文書、宣伝映画が作られているのが現状である。今一度冷静にマラソンの実況を見て

ほしいと筆者は考えている。

ここまで、辛抱強く本稿を読んでこられた方々は、南京での 30 万人大虐殺を初めとする日本軍暴虐説は、当時南京に在住していたアメリカ人が見た事実とは似ても似つかぬものであり、宣伝目的で人為的に造られたものであることが理解出来たであろう。大虐殺説は、南京在住の 25 人の外国人のうち 9 人のアメリカ人のなかで、蒋介石政権顧問のベイツが、フィッチと協力して南京陥落直後から宣伝を始め、殆ど風聞しか実情を知らなかった他のアメリカ人などがそれを信用してしまったことから、この説が次第に肥大し始めたことであった。フィッチ自身親中反日組織を作った活動家であることは、注 2 で説明した通りである。フィッチの妻は蒋介石夫人宋美齡と友人だったし、ベイツとフィッチは『戦争とは何か』を発行しようとしていたティンパーリにその原稿を送った。従ってこの 3 人が「南京大虐殺」を世に出した人々だったと筆者は考えている。しかし彼等の努力にもかかわらず、この本の流通についての記録は殆ど無い。東京裁判でこの本を探し出した検事団が利用したが、その後、1970 年代に中国が政治利用するために問題にするまで再び消えていた。このことこそが、南京事件の虚構と「南京大虐殺の目撃証人」は事実上いなかったことの証左であろうと思っている。

最後に、読者の理解を助けるために、二つの中国側資料（東京裁判の検事側提出証拠）をお目につけよう。これらは、恐らく日本の研究者以外には知られていないと思う。**検察側文書第 1706 号**の一部には次のようにある。日本軍による暴虐の事実を全力を挙げて調査したときの文書である。

「調査の期間中、敵側（日本側）の欺瞞や妨害活動が激しかったために、人々の心は消沈してしまったので、自発的に日本軍による殺人の罪状を申告する者は非常に少なかった。調査員を派遣して人々を訪問しても、あたかも「冬の蟬」のように口を閉ざして語らない者、或いは事実を否認する者、自分の体面上しゃべらない者、転居して不在の者、生死不明で調査の方法の無い者があった。」

この調査が行われたのは、1945 年から 46 年にかけての日本の敗戦後であった。その頃の日本のすべての国家機関はアメリカをはじめとする連合軍の統制下にあった。そのような状況のなかで中国の検察官が、「日本側の欺瞞や妨害活動が激しかったから、日本軍暴虐の証言を殆ど得ることが出来なかった」とあるのは真に不自然極まる言い訳である。彼等が期待したような日本軍の暴行は無かったので証言を集めることが出来なかったという状況がありのままの事実であろう。

ところがこのような証言集めに苦勞した挙げ句、東京裁判に提出された中国人による日本軍暴虐の証拠は多い。しかしそれらが事実でなかったことを示している事例をお目につけよう。前述したヴォートリンの手記にあった **1937 年 12 月 17 日夜**以降の金陵女子文理学院の様子について、当時同学院に在職していた女性の証言である。1946 年 8 月 29 日、

検察官が朗読した。

「1927年12月17日の夜、兵が校庭に入り、11名の娘達を運び去って、そのうち9名が日本軍将校によって強姦されたあと逃げ帰ってきた。1人の娘は、4、5名の兵によってくり返し強姦された。最初の4週間は兵達は娘を手に入れるためにやってきた。このような行為が下火になる迄には4、5週間かかり、危険が去る迄には数ヶ月かかった。」

この証言をした女性も検事も彼女のボスであるヴォートリンが、前述したような報告書を学院の理事会に提出したことを知らなかったのであろう。読者はかかる事実無根の供述書を根拠として東京裁判の判決が下され、映画も作られていることを知って、どのように南京事件の実態を把握されただろうか。これが読者に対する筆者の問いかけである。

終

(注)

- 1、ベイツが蒋介石政府の顧問であったことは、東中野修道亜細亜大学教授がイェール大学所蔵の南京関係文書の中で発見した新聞記事の切り抜き(左)に出ている通りである。顔写真の下には、次のような説明が付けられていた。



南京事件前後の新聞記事。ベイツ教授(写真)が中華民国政府顧問であったことを示している。

中国の首都南京の城門を攻める日本軍の砲撃がこだまする中、それに怯むことなく、オハイオ州ハイアラム出身の南京大学歴史学教授にして、中華民国政府顧問のマイナー・サー・ベイツ博士(上掲写真)は、城壁で囲まれた南京城内の自らの持ち場を離れることを拒否した。アメリカ大使館は、ベイツ博士が最後の瞬間に逃げることを許可し、彼に城壁を下りる際の縄ばしごを提供した。(括弧内原文、傍点筆者)

(『南京事件—国民党極秘文書から読み解く』(東中野修道著、草思社)

p.118, 9

- 2、1938年7月に成立した2つの親中反日団体とは、次の二つである。

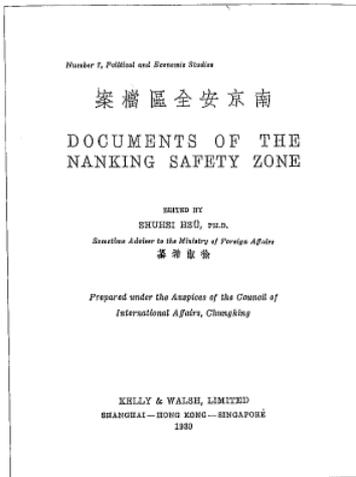
・中国を援助する教会委員会(会長：H・シルビー—元アメリカ商工会議所会頭、副会長：J・R・モット—YMCA 世界同盟会長、マーガレット・フォルシス—YMCA 北米同盟、ジョージ・フィッチ—中国 WMCA 主事)

・日本の中国侵略に加担しないアメリカ委員会(名誉会長：ヘンリー・スティムソン—元国務長官、理事長：ロジャー・グリーン—元在漢口アメリカ総領事、事務総長：ハリー・プライス—元燕京大学教授、発起人：マーガレット・フォルシス、ヘレン・ケラー、マックス・スチュアート、ジョージ・フィッチ他)

前者は、全米に12万5千のプロテスタント教会及び関係組織を傘下に持ち、ルーズベルト政権に、中国援助を行わせるのに大きな力を発揮した。後者は、『日本の戦争犯罪に加担するアメリカ』『戦争犯罪』などの反日パンフレットを大量に作成し、マスコミ、政治家、政

府筋に働き掛けるなど、アメリカの世論を反日に向けるのに大きな役割を果たした。

3、『南京安全区档案』（Documents of the Nanking Safety Zone）



南京戦の翌々年の1939年（1年半後）に、上海のイギリス系出版社、Kelly & Walsh社から出版された。編集者は、国民党政府の外交部顧問であった燕京大学教授の徐淑希。重慶政府の外交部の委員会の監修となっている。

安全区国際委員会の文書、主として日本軍当局、日米大使館担当者に、抗議、要求、報告を提出した文書からなるが、国際委員会の約2カ月間にわたる活動記録とみることができ。その中の日本軍暴行記録は、中国人が言って来たものを、その事実を確かめずに、そのまま載せたものが大半で、証言者、目撃者が記述されているものは極めて少ない。しかしながら、日本軍が南京に入城してから、外国人が、南京の現場にいて、ほぼその時点で発行した文書だから、南京事件

の実態を知る為の貴重な「一次資料」である。日本語訳としては、洞富雄氏による『日中戦争史資料9 南京事件I I』（河出書房新社）があるが、富澤繁信氏により、より正確な訳がなされ、平成16年『「南京安全地帯の記録」完訳と研究』（展転社）として出版された。

- 4、12月8日、唐生智南京防衛軍の布告は「全ての非戦闘員は国際管理の安全地帯に集結しなければならない」というものであった。そして、特別許可がない限り、安全遅滞外での非戦闘員の移動は一切禁じられた。
- 5、1938年1月5日、上海のアメリカ総領事ガウスから国務省宛に書簡が出されている。そこには南京大学のベイツ教授が書いた日本軍占領後の南京の状況に関するメモを送ること、そしてそれはシカゴデイリーニューズ記者のスティール氏が等総領事館の館員に手渡したものであると書かれている。（『南京事件資料集 アメリカ資料編』、p.105）また、ベイツが1938年4月12日付で上海から「諸友人宛て」に送った手紙（Eyewitness to Massacre p.34）には、「その本には12月15日に南京を離れようとしていたさまざまな特派員に利用してもらおうと、私が同日用意した声明が掲載されています。」とメモを特派員向けに書いたことが明記されている。
- 6、このメモをもとにして、似たり寄ったりの日本軍暴虐の記事を書いたのが、スティールであり、ニューヨークタイムズのダーディン、そしてパナイ号には乗っていたが南京には足を踏み入れてなかったロンドンタイムズのマクドナルドと言う記者たちであった。
- 7、・12月15日（日本時間16日）の『シカゴデイリーニューズ』（スティール）
…南京陥落の物語は、落とし穴に落ちた中国軍の言語に絶する混乱とパニックとその後の征服軍による恐怖の支配の物語である。何千もの生命が犠牲となったが、多くは罪のない人達であった。…

それは羊を殺すようであった。…以上の記述は包囲中の南京に残った私自身や他の外国人の観察に基づくものである。…

・12月18日（日本時間19日）の『ニューヨークタイムズ』（ダーディン）

…南京における大規模な虐殺と蛮行により…殺人が頻発し、大規模な略奪、婦女暴行、非戦闘員の殺害…南京は恐怖の街と化した。…怖れや興奮からは知る者は誰もが即座に殺されたようだ。多くの外国人たちに目撃された。…

いずれも、ベイツのメモをもとにしていることが分かる。実際の南京の状況は、南京在住の外国人の家族への手紙に見るように、余りにもこれとは異なるものであった。

- 8、福田篤泰外務省事務官の事。後に吉田茂首相秘書官、衆議院議員、防衛庁長官、郵政大臣などを歴任。田中正明氏のインタビューに次のように答えている。

「当時僕は役目から毎日のように、外人が組織した国際委員会の事務所に出かけた。出かけてみると、中国の青年が次から次へと駆け込んでくる。

『今どこどこで日本の兵隊が15、6の女の子を輪姦している』。あるいは『太平路何号で日本軍が集団で押し入りものをかっぱらっている』等々。その訴えをマギー神父（筆者注：福田氏の勘違いで実際には委員会の事務局長を務めていたスマイス）とかフィッチなど3、4人が僕の目の前で、どんどんタイプしているのだ。

『ちょっと待ってくれ。君たち検証もせずにそれをタイプして抗議されても困る』と幾度も注意した。時に私は彼らを連れて強姦や略奪の現場に駆けつけてみると何も無い。住んでいるものも無い。そんな形跡もない。そういうことも幾度かあった。」（『南京事件の総括』（田中正明、謙光社）p、171）

- 9、マギーは、東京裁判の証人として出頭し、2日間にわたって南京で日本軍がいかにひどい略奪、暴行、強姦、殺人、放火などの限りを尽くしたかを証言した。ところが、反対尋問でブルックス弁護士から、証言した不法行為、殺人の現行犯のうち証人自身が目撃したものはどれくらいあるのか、と問われたところ、「殺人は1件を目撃した」と答えたのである。ところがマギーの妻への手紙（12月19日付）によると、この1件すらも実際には目撃していないことが分かる。

一昨日の事、私は私たちの住んでいるところのすぐ近くで、1人の哀れな男が殺されるのを見ました。多くの支那人は臆病で、誰何されるとバカなことに走りだします。それが彼の身の上にもおきました。殺人現場は、私たちの見えるところから竹垣を曲がったところだったので見ることはできませんでした。後からコーラがいき、男は頭を2発撃たれたと言いました。

確かに、なんらかの理由で逃げ出した男が撃たれたらしいが、しかし実際には、彼が書いている通り、彼自身は殺人現場を目撃していないのである。東京裁判で、苦し紛れに「1件は見た」と言ったことすら、嘘であったのである。

さらにいえば東京裁判の証言で、人口の事を聞かれ、安全区に約20万人が流れ込んだ、と言いながら、安全区外に大勢の人間、少なくとも30万人はいたなどというウソを平然と述べているのである。安全区外に人はほとんどいなかったことは国際委員会の人間は誰でも

知っていた。何しろ自動車で自由に市内を回っていたのだから。ところが、裁判になるとそんなことは誰も知らないだろうとばかり途方もない大ウソの数字を並べたてたのである。

10、ティンバリーは国民党の工作員であったことは、『国民党中央宣伝部国際宣伝処工作概要』（台北、国民党史資料館）によって明らかになっているが、かれは単に『戦争とは何か』を編集して、イギリスのゴランツ社から出版しただけではなく、国民党がアメリカに作った覆面ニュースリリース会社「トランス・パシフィック・ニュースサービス社」の責任者も務めていた。（『南京事件の探求』（北村稔、文芸春秋）p。44）